

<作品評>

審査委員長 小松健一

審査員 藤森邦晃

大賞 「旅路」

熊倉 颯（東京都）

この春、高校を卒業して専門学校に入学した祝いにか、「さんふらわあ・ふらの」に乗船して北海道へ旅立った時の記録であり記憶。

作者にとって正に新しい人生への旅路でもあった。第34回展の昨年から新たに設けられた「U19大賞」、十代に光をあて奨励し、応募を促進させようとする試みであるが、さっそくその効果が出はじめたのだろうか。

この作者は19歳だ。十代での大賞受賞は35回展の歴史上、初めてである。特選にも中学二年生が入っている。写真は何ら変哲もない昼下りの甲板を撮った三点の組写真。人影のないデッキから広大な北海道の大地が見え始めた。午後二時に終点、苫小牧港に接岸するのだ。まだ寒気をふくむ北の大気の中にも早春の訪れを感じさせる。俳人・与謝蕪村の「春の海終日のたりのたりかな」を思いおこす風景である。水平線を画面の真ん中に大胆に配するなど若々しい感覚に期待したい。

（選評：小松）

推薦 「洗礼」

樋口 良夫（愛媛県）

驚いたことにこの作者、昨年の第34回展において大賞を受賞した人だ。それもモチーフ（題材）も全く同じ高知県大月町に伝わる伝統的な神事「水浴びせ」である。通常、同作者で同じテーマを撮ったものは、余程のことがない限り入選できない。まして入賞するなど考えられないことであった。しかし、入賞した。それは前回の大賞作品を「メッセージ性、独創性、革進性」（第34回「作品評」）においてグレードアップしていたからだ。前年の受賞がなければ大賞を受賞していたかも知れない。それは三人の審査員の共通した認識でもあった。今までに幾多の知られた写真家がこの神事を撮ってきたが、これ程までに昇華された作品を、僕は知らない。

日本の新しい民俗写真として後世に残るだろう。傑作である。

（選評：小松）

推薦 「将来が楽しみ」

有田 勉（岩手県）

作者の有田さん82歳。昨年の第34回展の特選に引き続き連続で入賞した。しかも今回は推薦である。東日本大震災で甚大な被害を受けた宮古市は、三陸海岸を代表する漁港の町でもあったが、その被害は計り知れないものがあった。関連した水産加工業においても人手不足などが深刻となった。重労働である昆布の湯通作業をまだあどけない少年少女が担っている。その懸命の姿、表情を作者は共感を持って捉えている。港に近い朝の作業場の臨場感も出ていて清々しい作品に仕上がっている。

（選評：小松）

特選 「お魚さん、遊ぼう！」

向井 裕志（愛媛県）

コバルトブルーの澄んだ海中にカラフルな熱帯魚が泳ぐ。そこに元気に戯れる子どもたち。まるで沖縄か奄美諸島の海かと思間違う。でも撮影地は四国・愛媛県 最南端の愛南町だ。高知県宿毛市に隣接した町である。近年の地球温暖化現象が進んでいるとは言え、ここまでの状況になっているのかと驚いた。

しかし、子どもたちにしてみれば、見たことのない美しい魚たちに囲まれて興味しんしんだらう。スマホでの撮影と言うが、的確なシャッターチャンスと画面構成で子どもたちの生態を見事に捉えている。

（選評：小松）

特選 「爆発だー」

中 篤（鹿児島県）

国内線のパイロットが一番いやがるルートが桜島上空だと聞いたことがある。桜島の噴火もあるが気流の変化が激しいと言う。この作品を見たときに、まずこの光景はどの飛行ルートなのだろうかと思った。東京方面からはこうは見えない。「作品説明」を読むと鹿児島空港から奄美空港行き、錦江湾上空で撮影したことがわかった。それにしても“写真の神様”がプレゼントしてくれたような絶好のチャンスに遭遇したものだ。上空に上がる噴煙、夏空に湧く雲の峰、翼の位置、蒼々とした桜島と錦江湾。そして光線状態。13歳とは思えない見事なシャッターの切り口である。奄美大島に暮らす少年が一瞬のラッキーチャンスを掴んだ。

（選評：小松）

特選 「海の墓」

木浦 正夫（岡山県）

この写真を見た時に、津波や高波が来たらみな流されてしまわないかと言う不安、次にこんな光景が日本にあるのだろうかと言う疑問だった。審査員の一人は「合成かも知れない」と言ったぐらいである。調べると「海の墓」は実際にあった。鳥取県の日本海に面した小さな町の海岸に東西約350mにわたり、二万余基の墓標が並んでいる「花見潟墓地」だ。鎌倉時代後期、中世以降から自然発生的に成立していったと推定されている。作者は岡山から霊峰大山を越えて、この地に巡り合ったのである。「海を愛し、海に暮した人々の精霊が荒波の日本海を見守っている」と作者は記しているが、海に囲まれた海洋国・日本の風土の一つの典型であり、祈りの場でもある。（選評：小松）

特選 「遙かなる地平線に向かって」 坂西 孝仁（東京都）

広大な原野を一車輛の列車が夕日に染まりながら行く。スケール感のある風景は何処なのだろうか。北海道根室本線、愛称「花咲線」と呼ばれる区間での撮影だと言う。釧路から終点根室に至る途中、牡蠣で知られる厚岸を過ぎ、花咲ガニが有名な花咲までの中間辺りとなる落石付近の光景だ。良いポイント決め、時間帯を待っての撮影である。車輛を点景として取り入れたのも良かった。

明治40（1907）年から117年の歴史を持つ根室本線、その一部区間が今年の三月末をもって廃線となったが、この写真が何か記念碑的な感じに僕には思えたのである。（選評：小松）

優秀賞 「盆送りの海岸」

伊藤 良一（神奈川県）

神奈川県三浦市の三戸海岸で行われる伝統の精霊流しで、供物と祈りを捧げる光景を3枚の組写真で構成している。竹と麦わらで作られた船を沖へと運んで、先祖の霊を海に送り出すというもので、共通したテーマである祈りを真四角のフォーマットでとらえることで画面中央に視線を集中させ、狙いを的確に伝えることができている。また実際は、色とりどりの装飾を施された船だが、モノクロで表現することによって色の情報を省き、伝統行事の記録から、作者の思いを強くさせる作品へと昇華させることができている。入賞作品の中でもテーマ性を強く感じさせた作品だった。（選評：藤森）

優秀賞 「午後の港」

錦織 淳（島根県）

島根県出雲市にあるかつて栄えた港町だという。その面影を感じさせる全景写真からスタートしている。俯瞰する位置からとらえることで説明的ではあるが、この町の雰囲気伝えることができ、どんな暮らしがあるのだろうかという興味が湧く。3枚組の中央に配置した建物の中から漁師の後ろ姿をシルエットで見せている写真がこの作品のキーだ。人物を大きくとらえているわけではないが、両手に何かを持ち、ちょっと丸まった背中と右足を上げた瞬間は、小さくても存在感十分。そしてどの作品も光を意識したことで共通項ができ、内容的にも見せ方的にもまとまりのあるものになっている。（選評：藤森）

優秀賞 「海人」

喜舎場 和広（愛知県）

人間の表情が写っていない写真で、かつ一枚で訴える力のある写真を撮るのは非常に難しいし、撮った中からその一枚を見つけ出すことも簡単ではないが、作者は「この手でこれまでの人生を表現できないか」という表現を試みた。優しい光の中で、長年、荒海の中で漁をしてきた手を主役に据えた。強い光で陰影を強くするという手法も手の年輪を感じさせる効果的な方法だが、あえて柔らかい光で見せたことで、漁師さんの人柄までも想像できる。手の形はカメラマンが注文したのかどうか分からないが、ここにも漁師さんの個性を感じさせ、どんな表情をしているのか思い浮かべてしまう。（選評：藤森）

優秀賞 「市場のウーマン」

芝崎 静雄（愛媛県）

市場で働く女性をモノクロでとらえた作品。黒の濃度がたっぷりで引き締まったプリントからは、現場の臨場感が伝わってくる。そして内容に目をやると港で上がったばかりの魚を選り分けているのか、手際よく作業している向こうに羽を広げた鳥がいるなど、一枚の写真の中にさまざまなドラマが展開されている。何よりも作者がカメラ位置をグッと下げたことによって、働く女性から鳥、船、海まで奥行き感たっぷりにとらえることができた。おそらく、この女性たちと会話をしながら撮ったのだと思うが、そういうコミュニケーションこそが、いまの時代の撮影では必要になってくるだろう。（選評：藤森）

優秀賞 「海の若者達」

大塚 辰夫（神奈川県）

「海に憧れる若者の姿を動と静でまとめた」ということだが、湘南の風を受けて激しく乱れる髪をどうすることもできずに諦めたのか、スマホで自撮りするのに集中しているのが面白い。夕方の光を受けて髪が色づいているのも写真に立体感を与えて効果的だった。この距離感ならば、作者は声をかけて撮っているだろうが、それでもカメラマンのことは気にせず、記念写真を撮る光景にクスクスとしてしまう。左の女性は手にマスクを持っているが、これがコロナ禍明けの写真であることを示しており、ささやかな時代の記録にもなっていることを忘れてはいけない。

（選評：藤森）

優秀賞 「解放」

植木 亮太（埼玉県）

モデルとなったのが作者のお子さんだという。海をさりげなく左に入れ、港の雰囲気を感じさせるような網を背景に、夕方の色彩をバッグに印象的にとらえている。「解放」という内容は読み切れないところもあるが、適度なボケによって少年に視線が向く構成になっていて、やや口を開いた表情や少し広げた指先などから、彼が何を思っているのかを想像しながら、作者の意図を読み解こうとする。親子で小さな旅をし、こうして写真に残すのは、お父さんにとっては作品づくりの一環かもしれないが、この子にとって、素敵な姿を写真にしてもらえたことで、将来きっと大切な宝物になるはずだ。

（選評：藤森）

優秀賞 「白銀の嶺 背景に」

石川 松五郎（千葉県）

この作品は、審査会の冒頭で登場し、審査員の間でもどこから撮ったのかと話題になった。スタッフが裏面を見て「東京湾を隔てて南アルプスの名峰北岳、間ノ岳、農鳥岳」をとらえたということで、一堂驚いたが、撮影地である市原からの位置関係を調べたら船と南アルプスの間に見えるビル群は、武蔵小杉だとわかった。超望遠レンズでとらえることによって、手前から奥までを一枚で記録できる圧縮効果がこれ以上ないほど活かされた。肉眼ではこうは見えないので、まさにカメラが持つ表現力を最大限に発揮した作品である。海と山をこうやって表現した作品は少ないのでインパクトは大だった。

（選評：藤森）

優秀賞 「波のデッサン」

黒木 武（宮崎県）

波によって浜に描かれる砂紋は、作者の思い通りに描けるわけではなく、タイトルのように波がデッサンしてくれるからこそ、見られる光景。その日、そのときに出会った光景をとらえるしかない。しかし、どこをどう切り取るかは作者次第となるわけで、ここにセンスが現れるのだと思う。また技術的には、カメラの角度、絞りの選定、ピント位置などを明確にしないとここまで完成された描写にはならない。作者の力量が伝わってくる。何枚で組めば効果的なのか難しいところではあるが、2枚で対照的に見せることにより饒舌になりすぎないようにしたのがいい。

（選評：藤森）

U19大賞「海への旅路 - 到着」

渡邊 真帆（東京都）

作者は15歳の高校生だ。春休みに友だちと伊豆七島の八丈島への旅行の時に撮ったもの。友だちが海へ向かっている後姿にシャッター切ったが、初めて訪れた土地への軽い昂奮や友だち同士だけの旅の解放感が表現されていて、見るものを爽やかにさせてくれる。逆光の中、銀色の黒潮踊る八丈の海は、彼女たちの未来を暗示しているかのようだ。

（選評 小松）

会長賞 「ひと休み」

阿部 黄菜（宮城県）

伊豆諸島最南端の青ヶ島沖での撮影だ。あまり見たことのない形状の船のデッキに9人の男たちが語り合いながら一息ついている。一日の作業が終ろうとしているのか、西日がさしている。青ヶ島と言えば、一番近い八丈島から約80km離れた絶海の独島であり、二重カルデラの地形を持つ火山島として知られている。そんな所にまだうら若い女性は何んでいるのかと不思議に思った。そうしたら彼女が勤務しているのは、海洋・深海調査や特殊船舶の運航事業など専門に手がける会社だった。だからこそ、こうしたシャッターチャンスに恵まれたのであろう。がんばって下さいね。

（選評 小松）

特別賞 「夏休み」

阿部 高嗣（愛媛県）

子どもたちには一生忘れない夏休み。家族そろっての旅行、そこでのスイカ割り。好きなだけ大きなスイカにかぶりつく。勢いあまって種が飛んでおでこにくっついた。その絶妙な瞬間を逃さずお父さんがパチリ！！ いかにも夏らしい空、低い山並、白浜と青い海、背景も言わずもがなである。撮影地は瀬戸内海の尾道から今治を結ぶ「しまなみ海道」上に浮ぶ伯方島。「伯方の塩」で有名な島でもある。子どもの表情をクローズアップで捉えた写真ではあるが、そこには家族愛がしっかりと描かれている。

（選評 小松）